

## 「心は燃えていますか」

### ルカによる福音書 24 章 28～34 節

聖学院大学 心理福祉学部兼人間福祉学部長 古谷野 亘

秋学期の授業が始まりました。今年は聖学院大学の創立 30 周年ですので、秋学期の最初の全学礼拝は「創立 30 周年を覚えて」というシリーズ礼拝になっています。30 年という歴史は、大学の歴史としては決して長くありませんが、県内の私立大学の中では長い方ですし、人間の一生で考えればもちろん長い時間です。

私が聖学院大学に来ることになったきっかけは、人間福祉学科の開設準備のお手伝いをしたことです。人間福祉学科の開設は大学創立後 10 年の 1998 年でした。その翌年の 1999 年 4 月に私はこの大学にやってきました。ですから、今年がちょうど 20 年目です。大学の歴史のおよそ 3 分の 2 を、ここで体験してきたということになります。

聖学院大学に来た当時、この大学にいるのはせいぜい 5 年くらいだろうと思っていました。それ以前に働いていた大学や研究所はどこも数年で辞めていましたし、聖学院大学の前に務めていた北海道医療大学には 2 年 9 カ月しかいませんでした。とにかく寒くて、とても長居はできなかったのです。それは短い方でしたけれど、そんなわけで、聖学院大学にも長くいるつもりは全然なかったのです。それが 20 年もいることになってしまいました。

なぜこんなに長くいられたのかと考えてみましたが、居心地がよかったからとしか言いようがありません。しかも、なぜ居心地がよいのかというと、それがよくわからないのです。北海道医療大学がある石狩当別ほどではありませんが、私の住んでいる東京都の地域と比べると冬は寒いですし、夏は暑いです。交通の便もよくはありません。大宮から 1 駅なのは間違いないのですが、東京から来ると、この 1 駅がやたら不便です。そのうえ駅から遠く、歩くのは大変です。施設・設備も貧弱なことは否めません。大学の施設・設備には規模のメリットが働きますから、学生数の少ない大学はどうしても不利で、大きな大学のように立派にはなりません。そしてその学生はというと、... どうでしょうか。人はよいのですけど、勉強が好きだという人はあまりいません。そんな大学なのに、なぜか居心地がよいのです。

どうもこれは私だけではなくて、入学してきた学生の皆さんにとってもそうらしいのです。毎年行っているアンケート調査の結果を見ると、満足している人が多いのがわかります。それも、聖学院が第 1 志望だった人たちだけではなく、他の大学に入れなかったから仕方なく来たという、いわゆる不本意入学の人のなかにも「聖学院大学に来てよかった」という人が結構多いのです。

「聖学院大学に来てよかった」という人が、そのように思う理由はさまざまでしょう。最近多くなってきたのはボランティア活動に参加したからという人たちですが、そのほかにも学友会の活動やクラブ・サークル活動に打ち込めた、気のあう友だちに会えた、あこがれの人に出会えた、恋人ができたなど、さまざまです。中身はさまざまですが、大学に入って何か打ち込めるもの、心ときめかせるもの、心を燃

え上がらせる何かに出会えたときに、「聖学院大学に来てよかった」と思えるようになります。ここにおられる学生の皆さんも、何かそのようなものやこと、あるいは人に出会っていただきたいと思います。

さきほどお読みいただいた聖書の箇所は、イエス・キリストがエルサレムで十字架につけられ、処刑された直後の物語です。弟子たちは、ナザレ出身のイエスという人がローマ帝国の支配を打ち破って新しい王国を作る政治的・軍事的なリーダーであると信じて、故郷を捨て元の職業を捨ててついてきました。その新しい王国の建設に加わり、活躍して、自分も出世したいと考えたのです。ところが、イエスはあっさり捕らえられ、処刑されてしまいます。新しい王国で人々の上に立ち、豊かな暮らしを実現したいという弟子たちの希望は潰え、弟子たちは自分もイエスと同じ目に遭うのではないかと恐れ、不安のなか身を隠していました。イエスを見捨てて逃げ出した後ろめたさや、自分のふがいなさへの嫌悪もあったことでしょう。そのような時に、イエスが復活したと言い出す者たちが現れました。

気が変になったと呆れたのでしょうか、2人の弟子がエルサレムを離れ、近郊のエマオという町に向って歩いていました。そこに復活したイエスが現れます。しかし弟子たちは、それがイエスだとは気づきません。弟子たちは言います。「ナザレのイエス …… は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。 …… わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださいと望みをかけていました」(24:19b-21a)。イエスは一緒に歩きながら諸々のことを教えてくれます。エマオの近くで夕食の席に着いて、弟子たちが、その人がイエスであると気づいたとき、イエスの姿は見えなくなりました。彼らに残されたのは、心が燃えていたという感覚だけでした。

私たちの毎日の生活には、思い通りにならないことや不満なこと、腹が立つことがいっぱいあります。もちろん不安がいっぱいありますし、自分の不甲斐なさや力不足に悩み、落ち込むこともしょっちゅうです。それは、指導者であると信じてついてきたイエスを奪われて途方に暮れ、不安のなか、トボトボと歩いていた弟子たちの姿と重なります。しかし、自分の不甲斐なさや力不足に思い悩み、落ち込んでしまうのは、もしかしたら、何もかも自分の力で成し遂げ、前に進もうとしていることの裏返しであるかもしれません。努力して前進しようとするのは立派なことではあるのですが、そこには大きな落とし穴があることをも知っておくべきでしょう。

自分の力によって前進し、成功を得るのだとしたら、到達して手に入れたものは、すべて自分のものです。それはうれしいですし、自慢したくもなります。しかし、もしうまく行かなかつたら、それもすべて自分の責任、自分の能力の不足のせいになってしまいます。それを認めるのはつらいですし、落ち込みます。場合によっては、生きていても仕方がないと思えてくるかもしれませんし、親や周囲の人のせいにしたくなるかもしれません。自分に絶望しての自殺や、自暴自棄になったの凶悪犯罪や引きこもり、そして自分より劣っていると思われる人への差別や暴力などに直結することさえあります。

キリスト教で、そして聖書の中では、一生懸命に努力して、自分の力で何かを達成していこうとする人の生き方は、望ましいものとされていません。望ましい、人間の本来あるべき姿として描かれているのは、たとえば無力な羊のような生き方です。家畜化された羊は自然界で生きる力をほとんどもっていませんから、もっぱら羊飼いに守り、導かれ、養われる存在です。たとえ自分が行きたい方向に行けなかったとしても、守られ、導かれ、生かされます。

古代イスラエルの偉大な王であったダビデは、自分を羊に、主である神を羊飼いにたとえた詩を残

しています。旧約聖書の詩編第 23 編ですが、皆さんの座席にある聖書とは違う翻訳で、一部を読んでいます。

- 1 主はわたしの<sup>ほくしゃ</sup>牧者 わたしは<sup>とほ</sup>乏しいことがない
- 2 神はわたしを緑の牧場に伏させ 憩い<sup>みずべ</sup>の水辺に<sup>ともな</sup>伴われる
- 3 神はわたしの<sup>たましい</sup>魂 を生き返らせ み名のゆえにわたしを正しい道に導かれる
- 4 たとえ死の陰の谷を歩んでも、わたしは<sup>わざわ</sup>災いを恐れない  
あなたがわたしとともに<sup>むち つえ</sup>おられ、あなたの鞭と杖はわたしを導く

今日の賛美歌と同じく、そこで歌われているのは、主なる神への強固な信頼です。目に見えない神の守りと導きを信じ、頼るとき、私たちは失敗の恐れや不安、憂いから解放され、他人の評価からも自由になれます。そして、そうなることによって、かえって自分の力を十二分に発揮できるようになれるでしょう。ダビデは、そのようにして偉業を達成したのです。

この大学にある居心地の良さの本当の源は、施設や設備ではなく、愛をもって導いてくれるイエス・キリストと父なる神への信頼、そして神への信頼に生きる人たちの姿にあったのだと思います。

祈りましょう

知恵と光の源である神様、み名を賛美します。み名によって立てられた諸学校、ことに私たちの聖学院大学を恵み、導いてください。私たちはこの大学に集められ、学びと研究、教育と奉仕のわざに従事できることを感謝いたします。どうか私たちが、あなたの恵みと導きを頼りに毎日の生活を送り、み心にかなう人となることができるよう支えてください。救い主イエス・キリストのみ名によってお願いいたします。アーメン

2018年9月27日 聖学院大学 全学礼拝シリーズ礼拝「創立30周年を覚えて」